

## 特選

「小さな命のために」

池田隆之（田辺三菱製薬株式会社 東京支店 病院第二営業所）

「人の命を救えることです」。MRになって良かったことは何かと聞かれたら、私はこう答えます。もちろん直接的に患者さんを診療するのは医師です。その点でMRは間接的な立場にしか過ぎないかもしれません。しかし、MRが真に薬物治療のパートナーになれた時、MRも医師と共に患者さんを助けることができます。そしてその瞬間、何物にも代えがたい喜びを味わうことができるのです。特にそれが赤ちゃんならばなおさらのことです。赤ちゃんには無限の可能性があります。小さな命を終わらせてはなりません。

ある日のこと、小児科のT先生からついて来てほしい所があると言われ、私は新生児集中治療室（NICU）に向かうことになりました。入室すると保育器がずらりと並び、赤ちゃん達には点滴の管や栄養を胃に入れるためのチューブがたくさん付けられていました。

呼吸窮迫症候群（RDS）という疾患があります。早産の場合、未熟児の多くは肺胞が開かないため酸素を取り入れることができず、うまく呼吸できません。私が情報提供している製剤は肺を拡張させ、人工呼吸器は低い圧設定、低い酸素濃度で管理できるようになります。しかし、この製剤は懸濁液の調製法が難しく、また新生児に投与されることから、用法用量も細かく設定されています。肺胞全体に行き渡らせるためには、数回に分けて1回ごとに赤ちゃんの体位を変換して注入する必要もあります。新生児への適正使用には特に、日頃から医師、薬剤師、看護師など医療関係者に対する適切な情報提供が欠かせません。

RDSの患者数は年に約5000人とされています。1500～2000gの低出生体重児ではその10～20%ですが、1500g未満の低出生体重児ではその30～40%に上ります。中でも体重が500gに満たない超未熟児の場合、予後は不良です。保育器のひとつに超未熟児の赤ちゃんがいました。泣くことさえ十分にできません。細い血管が網目状に見えて皮膚が赤く、まさに赤ちゃんです。片手の掌に乗せられますし、白衣のポケットにも入ってしまうほど小さいです。また、皮膚は桃の皮のようでもあり、もし爪が引っ掛けてしまえばペロッとむけてしまうほど弱いです。隣には黄疸で光線療法を受けている子もいます。目隠しをして光線から目を守り、時間により仰向けにしたりうつ伏せにして火傷を防ぎます。そのまた隣には生まれつき心臓が悪く、手術を待っている子もいます。それでもT先生が触れると、彼らは反応を示します。確かに生きています。時折見開いた目が、「僕達は必死に

生きているんだよ」と私に強く訴えかけているようでした。赤ちゃん達のこの姿を見て、多くの人はかわいそうだと思うでしょう。でも、私は違いました。懸命に生きている彼らの姿をこの目で見て、命の尊さ、命の重さというものを改めて実感したのでした。

T先生は、製剤を実際に投与した赤ちゃん達が入院するNICUを見せてくれたのでした。T先生は多くを語りませんが、私はこれをメッセージとして受け止めました。私達の製剤の先には常に病気に苦しむ患者さんがいることを、教えたかったのだと思います。この日を境に私は変わり、深い専門知識の習得のため日々勉強に励んでいます。とは言えMRは、医師がMRよりも多くの知識を有している環境下で活動します。専門知識でかなわない以上、とにかく信頼関係を築くことも重要です。提供する情報の質や対応の速さ等で変化が生まれたと思います。こうして医師から信頼を得ていくことの大切さを学びました。そして、付加価値として私の人間性を添えて、情報提供に努めるようになりました。

月日が経ち、私はT先生から「あの赤ちゃん、何とか退院の目処が立ちそうだよ。両親もとても喜んでくれてね。これからもよろしく」と言葉を掛けてもらいました。私はMRになって本当に良かったと思いました。生命関連産業に携わる一員として責任感を持って情報提供に取り組むことにより、医薬品を通して患者さんとその家族に貢献できることは大きな喜びです。日頃の情報提供が役に立ったと思うと、改めてやりがいを感じます。

「薬」を片仮名で書くと「クスリ」です。これを反対から書くと「リスク」です。文字通り、薬は主作用も副作用も表裏一体であることを言い表しています。だから、特に患者さんのためにという視点を大切に、笑顔を取り戻すお手伝いをしています。私が現在担当する東京都内の大学病院では診療科も多く、高度な情報提供が求められ、提供する情報は他にも循環器や消化器、脳、免疫など多岐に渡ります。時には新薬や効能追加の治験に役立つ情報の入手にかかわることもあります。MRとして成長に限界はありません。一人ひとりの生命の輝きのために、これからも患者さんの力になりたいと思っています。

MRの存在意義を生命の尊厳と併せて教えてくれたT先生を、私は尊敬しています。